

都道府県別賞一等

笑顔の礎

大阪府 大阪明星学園明星中学校 一学年

山崎 英太

僕は小さな頃よく父と弟と近くの消防署に行っていた。消防車や救急車を見るためだ。隊員の人達が熱心に自分達の訓練を見て、見様見真似に体を動かしている僕に気が付いて、そのストレッチ訓練の輪に入れてくれたり、ハシゴ車に乗せてもらったりした。僕はその時間がとても楽しかった。その時、目の前で一台の救急車が出動していた。また、町中でも近くに大きな病院があったので、そういう救急車のサイレンというものは、僕の小さな頃にとっては胸が高くなるものであったが、今となっては考えてみたら、その救急車を呼んでいる人がケガや病気で必死に助けを求めている状況であったということだ。

病院に行けば、入院費、場合によっては治療費などがかかる。仕事をしている人は何日も仕事を休まなければならなくなる場合もある。僕は今回、生命保険のことを学んで、そういう時に生命保険が効果を発揮されるものだと思った。

治療費や入院費などは、日本の場合、国の医療保険制度や介護保険制度などの公的保障があるため、個人負担は少なく済む場合が多い。しかし治療費が高額になると、公的保障だけでは賄うことが困難になる場合があり、そんな時に自分で備えている私的保障いわゆる生命保険などで足りない部分を補うことが必要になってくる。

先日、祖父が首の骨のとても大きな手術を受けた。手術は無事に成功し、退院を控えている祖父は、真剣な顔で僕に「もし二年前に生命保険を見直していなければ、きっと周りの人にお金を借りたりすることになっていたかもしれないかった。」と言った後、やさしく僕の頭をなでてくれた。このように元気になってくれた祖父の姿を見ることが出来たのは、生命保険のおかげだと思った。

ところで、僕のお兄さんは去年までカナダに留学していた。カナダの話は全て海外に行ったことのない僕にとっては興味を引くものであったが、特に僕が驚いたことはカナダは日本と比べて治療や入院にかかる費用がとても高額で、例えば、風邪で医者に診てもらっただけで数万円、緊急医療センターへ行くと数十万円、入院費は一泊するだけでも数十万円かかるといふことだ。また、公的保険や民間保険の加入義務はなく、あくまで個人の意思で保険に入っているため、お兄さんの留学先の大学では約三割程の生徒しか保険に入っておらず、新型コロナウイルスにかかっても医者に診てもらわずに寝るだけの生徒が多かったようだ。

第61回中学生作文コンクール

日本では国民皆保険制度を導入しているため、カナダのように驚くほど高額の金額を請求されることは少ない。しかし、ケガをしたり病気になったりすることで生活に大きな支障がでてくることは間違いない。そのため私的保障の生命保険に加入しておくことは、万一のことが起きてしまった時に安心して治療を受け、笑顔で生活していくことの支えとなっていくものだ。今回の学びを通して思えた。

僕もこの先、成年となり社会に出ると思うが『備えあれば憂いなし』ということわざのように、しっかりと自分に最適な保険に入り、万一に備えておくことは、今と変わらず笑顔で元気に生活を送っていくうえで大切な「基礎」の「いしずえ」であると思った。